

民衆運動とバンドン精神

スリランカからの視点

シラン・イランペルマ

ザ・レフト・チャプター 2025 年 4 月 23 日

[People's Movements and the Bandung Spirit: A View from Sri Lanka](#)



バンドン会議のインドネシアのポスター、**1955 年** -- インドネシア共和国外務省によるパブリックドメイン画像

70 年前、29 カ国の代表がインドネシアのバンドンに集まり、アジア・アフリカ会議が開催された。その中には、ビルマ(現在のミャンマー)、インド、イン

ドネシア、パキスタンと並んでバンドン会議の5つのスポンサー国の一つであったセイロン(現在のスリランカ)首相のジョン・コテラワラ卿がいた。

彼自身の言葉を借りれば、コテラワラは「共産主義への妥協のない反対者」であり、バンドンでその立場を明確にした。彼の開会演説原稿は、皮肉なことに、二人の社会主義者ジャーナリスト、レジー・シリワルデネとジャンヌ・ムーネシングが書いたもので、好評を博した。しかし、その後の記者会見での発言は、物議を醸した。彼は、共産主義は「植民地主義のもう一つの形態」であると主張し、集まった国家元首たちに「西側帝国主義と同様に、ソビエト植民地主義に対する反対をも宣言する」ようよびかけた。

コテラワラ氏の奇妙な態度は、会議の進行に不和をまき散らし、特に動揺した中国の周恩来首相は、コテラワラは会議を壊そうとしていると非難した。実際、バンドンは中華人民共和国(中国)が初めて世界の舞台に大きく進出した場所だった。当時、国連での中国代表はアメリカが支援する台湾の民族主義政府であり、人民共和国は国連代表として認められていなかった。

コテラワラが帰国すると、左派と民族主義野党は、国を恥ずかしい目に合わせたとして彼を「バンドン・ブールワ」(シンハラ語でバンドン・ロバ)と非難した。野党のSWRDバンダラナイケ党首は、会議でのコテラワラ氏の発言が会議の団結を乱し、スリランカのためにならなかったとして、下院に不信任決議案を出した。

コテラワラ政権の余命はいくばくもなかった。バンドンのほぼ1年後の1956年4月、彼が率いていた統一国民党は総選挙で敗北した。バンダラナイケ率いるマハジャナ・エクサット・ペラムナ(人民統一戦線)は左翼民族主義組織で、その綱領はイギリス軍基地の撤去やプランテーションや銀行の国有化を掲げていた。バンダラナイケは3年後に暗殺されたが、未亡人となったシリマヴォ・バンダラナイケが党の指導部を引き継いだ。彼女は、1976年にコロンボで第5回非同盟首脳会議を主催し、第三世界の象徴的なリーダーとなった。

コロンボからバンドンまで

バンドン会議の起源は、コテラワラがミャンマー、インド、インドネシア、パキスタンなどアジアの5人の首相にたいし1954年4月に会議を開こうと呼びかけた、一見その場しのぎのイニシアチブにさかのぼることができる。当時は、国際的にもスリランカ国内でも鋭い矛盾が生じていた。

コテラワラは、1953年8月の「ハルタル」とよばれる大衆的な抗議運動をきっかけに首相になった。ハルタルは社会福祉の大幅な削減に反対する運動だったが、組織された左翼が主導していた。このハルタルにより、スリランカの内閣はコロンボ港に停泊しているイギリス軍艦 HMS ニューファンドランド号での緊急会議の開催を余儀なくされ、その後非常事態が宣言され、労働者を鎮圧するために軍隊が動員された。騒乱が何週間も続いた後、ダドリー・セナナヤケ首相は1953年10月に辞任し、脆弱な内閣をコテラワラが引き継いだ。

このハルタル以降、バンドン会議につながる一連の異例の出来事があった。ハルタルは国の支配階級を揺るがした。彼らの多くは、コテラワラのように、プランテーションや鉱山に出資する土地所有者だった。コテラワラは左翼の脅威が迫る中、米国に取り入ってなんとか事態を打開しようとしていた。米国は、スリランカが1952年に中国との貿易協定に署名したために同国への援助を停止していた。中国との協定は国民への食料供給を確保するために、国の右翼エリートが行った必死の動きだった。こうした流れのなかでコテラワラはコロンボ会議を呼びかけたのだった。

コロンボ会議は、公式の議題がなかったため、当時としては非常に珍しい会議だった。後にコテラワラが議会で行った声明によると、唯一の目的は「密接な隣国であり、多くの共通点を持つ国々が、全員にとって関心のある事柄について非公式に話し合うことができる」ことだったという。しかし、アメリカの記録は、隠された狙いがあったことを示唆している。 当時の駐スリランカ米国大使フィリップ・K・クロウが国務省に送った公電によれば、コテラワラはコロンボ会議を招集した主な理由は「共産主義と戦う方法を協議する」ためだと述べている。機密解除された1954年4月29日付けのコロンボ会議に関

する CIA 報告書は、この見解を裏付けており、スリランカの指導者たちがアメリカの代表に「消極的な反共産主義ではなく、積極的な反共産主義に国々を導いていく」と語ったことを明らかにしている。

公式・非公式の意図はともあれ、（コロンボに集まった）5 人による首脳会議はおのずから活発にたった。インドのネルー首相とパキスタンのモハメド・アリ・ボグラ首相は、カシミール問題をめぐって口論した。インドと中国の間の緊張についても議論された。インドネシアのアリ・サストロアミドジョジョ首相は、アジアとアフリカの指導者による広範な会議の開催を提案した。1954 年 12 月、5 人の首相は再びインドネシアのボゴールで会合を開き、アジア・アフリカ会議の運営について話し合った。その結果、1955 年のバンドン会議が開催され、非同盟運動と短命に終わったものの第三世界プロジェクトの火付け役となりました。

バンドン精神の社会的背景

バンドンを生み出した一連の動きのなかでスリランカが果たした役割には、当時の社会的背景が反映している。[バンドン精神](#)(つまり、バンドン会議に関連する反植民地主義と南南協力の理想)は、しばしば脱植民地化のプロセスを開始した指導者たち、ジャワハル・ネルー、クワメ・エンクルマ、ガマル・アブデル・ナセル、スカルノ、周恩来などのイメージを呼び起こす。しかし、バンドン精神は偉大な人々が生み出した結果ととらえ、そもそもこれらの人々を世界の舞台に導いた偉大な社会運動の結果ではなかったとみるのは誤りだろう。

例えばスリランカでは、進歩的な社会運動と国際連帯との間に有機的なつながりがあった。西側を向いた政治エリートに国の外交関係を拡大するよう促したのは、組織化された左翼だった。1948 年に独立を達成したものの、スリランカがソビエト連邦と中華人民共和国との正式な外交関係を樹立したのは 1957 年になってからだった。これよりずっと前に、1941 年は「セイロン・フレンズ・オブ・ソビエト連邦」が設立されている。また 1950 年には「セイロン・中国友好連合」が設立されるなど、多くの国際連帯組織が生まれた。そのよう

な組織の活動家たちは、国レベルの外交が具体化されるかなり前から、国際的なつながりを築いてきたのである。

「セイロン・中国友好連合」の創設者のクスマ・グナワルデナ会長は、社会主義者の国会議員で、朝鮮戦争中に米国がスリランカの港湾を使用したことを批判し、女性公務員を増やす運動をした。もう一人の創設メンバーはマルクス主義の経済学者 GVS デ・シルバで、彼はバンダラナイケ政権で水田法(耕作委員会の創設を通じて農民に力を与えることを目的とした土地改革政策)の起草に携わった。さらにもう一人の創設者テジャ・グナワルデナは、共産主義女性戦線の活動家であり、北ベトナム、北朝鮮、カンボジアを支援する組織を率いた国際主義者だった。彼女はその後、カイロに設置された「アフロ・アジア人民連帯機構（AAPSO）」書記局の創設メンバーの一人となった。

懐かしいバンドン会議の白黒写真の背後には、無名の社会運動や活動家たちの活動があった。彼らの多くは、世界の舞台で国際連帯に取り組むと同時に、自国の民族解放にも取り組んだ。グローバルサウス全体を通じて、バンドン精神の社会的背景をつくりだしたのは、労働者、農民、そして急進的な知識人の運動だった。

現代の大きな国際的な動きを分析する際には、時として「多極化」とか「BRICS の台頭」といった言葉が使われる。だがグローバルサウスのさまざまな国々がこの道を進むように駆り立てた社会的潮流についてのより詳細な分析が必要だ。これらは単にエリート主導のプロセスとして理解されるべきなのか、それとも、より良い生活を求める人々の要求と、これらの願望を実現するために帝国主義の制度を回避する必要性との間には、より弁証法的な関係があるのだろうか。

**シラン・イランペルマは、スリランカのジャーナリスト、政治経済学者。
Tricontinental: Institute for Social Research の研究者、*Wenhua Zongheng: A Journal of Contemporary Chinese Thought* の共同編集者
も務めている。**

【翻訳チェック 田中靖宏】